

《講演録》社会の中にあつて社会に立つことの意義

― 専修人の責務とは ―

日 高 義 博
(専修大学総長、法学博士)

* 本稿は、令和四年一〇月二日に開催された専修大学校友会山形県支部総会において行つた講演の内容をなすものである。コロナ禍の中での講演会となつたことから、校友会山形県支部の平和典支部長をはじめ役員・関係各位の方々が感染防止のための諸策を講じられ、開催の運びとなつた。講演に先立ち、専修大学校友会の桃野直樹会長からは、校友会活動がさらに活性化していくことの期待が寄せられた。皆様方の熱き思いに感謝するとともに、熱心に講演を聴いていただいたことに、感激した次第である。

講演内容を原稿にするに際しては、三森敏正評議員（石巻専修大学経営学部教授）が録画し、今関満夫常務理事が録音を反訳されていたので、それをもとに加筆・修正を施し、脚注を加えた。また、校正等については、専修大学大学史資料室（瀬戸口龍一室長「理事」、石綿豊大課長）の助力を得た。記して感謝の意を表する。（令和五年一月記）

* 令和五年九月二日には、専修大学北海道連合校友会設立六〇周年記念総会が札幌のANAクラウンプラザホテルで開催されたが、その際の特別記念講演として、同一のテーマ「社会の中にあつて社会に立つことの意義―専修人の責務とは―」を掲げて話をする事ができた。札幌での講演会については、三年ほど前に北海道連合校友会の大槻弘孝会長（評議員）から依頼されていたが、コロナ禍にあつて実施が延期されていた。今回、大槻弘孝会長をはじめ、北海道連合校友会事務局長の厚谷登巳夫さん、札幌支部長の佐藤文保さん、同副支部長の佐藤吉昭さん、同事務局長の竹内準さんなど多くの関係者の尽力によって、北海道連合校友会設立六〇周年記念総会が開催され、特別記念講演会の方が設けられた。コロナ禍が収束したとは言えない状況にあつて、北海道連合校友会設立六〇周年記念総会の実施に向けて尽力された関係者各位に対し、厚くお礼申し上げる。当日は、北海道にある校友会の一〇支部から約八〇名の校友

の参加があり、桃野直樹会長（理事）、木島博副会長（理事）、上島嗣男副会長（評議員）、校友会事務局（富沢健悟事務局長、剣持匠一事務局次長）の参加もあって、一堂に会した校友の表情が明るく活気に満ちていたのが印象的であった。熱心に講演を聴いている校友の姿は、私の刑法の授業を聴いていた学生の姿と重なり、授業をしているような感覚であった。オール専修の絆を感じる時間であった。（令和五年九月記）

〔目次〕

I はじめに

II 生き残りをかけた大学間競争の時代

III 建学の精神と二一世紀ビジョン「社会知性の開発」との関係

IV sociusをどう捉えるか

V あるべき専修人の姿

I はじめに

（1）講演の趣旨

皆さん、こんにちは。今日は山形に新幹線で入りました。福島から山形に向かう途中の車窓の風景を見ながら、久々の旅行だなと思いました。故郷の宮崎には三年ほど帰っていませんので、遠出をしたのはこれが最初かなという気がいたしました。今日のテーマは

「社会の中にあつて社会に立つことの意義」というテーマですけれど、大学の建学の精神とか二一世紀ビジョンとかをよくご存じの方は、だいたい私が今から何を話すのか推測されていると思います。が、卒業生の中には推測できない人も多いと思いますので、あえて選択しました。総長になりましたから、専修大学の建学の精神や大学の使命、そして「社会知性の開発」というビジョンの原点はここにあるということを説く必要があると思いました。先般、七月でしたか、石巻専修大学で第一回の総長講演会を開催しましたが、同じテーマでありました。石巻での講演会には、学生や教職員、それに育友会の方々も出席されていましたので、急遽、話題を広げました。今日は、見渡しましたところ、OG、OBの皆さんだけでありますので、話題を絞り、四〇分間弱話をさせていただきます。

たしか、学長講演会の時に、山形を訪れ、講演をした記憶があります。それがいつ頃だったか、もう記憶が飛んでいますが、今回が二度目の山形での講演会になります。「司会から…先生、平成二六年です。」平成二六年でしたか。その時は学長と理事長を兼ねていた時だと思えます。昨年の一二月に総長（第九代）に就任いたしました。理事長を退任して、あとは後輩に全部任せて研究者に戻ろうと思っていましたが、許されませんでした。もう少しやる仕事があると。専修人として、専修大学の卒業生として生き方を説く任務があると云われましたが、重い任務です。私としては、研究者としての生き様を見せることしかできませんが、なんとか職責を果たした

いと思っております。今年に入ってから、論文を二本、講演を三つこなしましたが、やっと頭が研究者に戻ったという感じであります。今日は、その思いを込めてお話をしたいと思います。

(2) 最近の私立学校法改正の議論をめぐって考えること

この数年、私立学校法の改正案が揺れに揺れました。令和元年の私学法改正の時には、大学設置・学校法人審議会の学校法人分科会にいましたので、法改正の作業にも関わりました。その時の改正は、学校法人のあり方を見定めた上での法改正でありました。しかし、今回は、学校法人のあり方に揺れが生じています。その揺れを何とか戻さないといけないということで、いろいろ活動をしました。今期の国会に改正骨子案が出される予定ですが、今のやや混乱した状況下では、果たして実現するかどうか未知数になりつつあります。なるべく揺れの戻った、学校法人のあり方を的確に考えた改正がなされることを祈っている状況です⁽¹⁾。この間の議論では、学校法人と公益法人との違いというのが、なかなか分かっていただけないことを痛感しました。

学校法人の制度は、第二次世界大戦後にスタートしているわけですが、戦前の学校の歴史を引き継いでいます。専修大学ですと、今日の新制大学の前は大学令に基づく旧制大学、その前は専門学校令に基づく専門学校・私立専修大学、さらに教育令に基づく専修学校というように高等教育の歴史を遡ることができます。この歴史的発展の背景には、一貫して高等教育機関としてのポリシーが流

れています。そのポリシーは、高等教育によって社会の屋台骨を支える人材を輩出し、かつ多様な人材を育成することです。このポリシーを貫徹する上での羅針盤となっているのが、「建学の精神」であります。ここでの羅針盤は、営利目的を追求するものではなく、明日の社会を支えうる多様な人材を育成するためのものです。学校法人も公益法人の一つに過ぎないという見方をする方々からは、なかなか分かってもらえない問題の核心です。

最近、学校法人の不祥事がいろいろ生じたので、法改正案にも揺れが生じたのだと思います。しかし、学校法人の理事会・評議員会の役割・機能は、公益法人の場合とは全く違うのであります。とくに評議員会の機能には、私学特有のものががあります。学校法人の評議員会は、諮問機関としての機能にとどまらず、卒業生に建学の精神を沁み込ませ、そして建学の精神を社会に発信する人々を多く輩出するように協力し、法人の運営を支えていくという任務も負っているのです。この建学の精神を醸成する土壌がなかったら、学校法人は成り立たない。理事会は学校法人の運営等に一定のポリシーを持っていますが、建学の精神を直接醸成するというのはなかなか難しい。建学の精神の継続的な醸成は、社会貢献を果たす卒業生が柱にならないとできないのです。私学法の改正案の検討の段階では、この学校法人の基本構造が崩れつつありましたので、私学の関係者の一人として危機感を持ちました。学校法人の特性というものを事ある毎に発信していかないと、私学のあり方が目に見えるよ

うにはならないと思いました。

(3) 建学の精神の重要性

現在の私学法改正の動向の背景を考えますと、今日の話題は、私学の立ち位置を示す上でも重要です。国立大学と私学は、基本的にどこが違うでしょうか。決定的に違う点が一つあります。それは、建学の精神があるかないかです。国立大学には、建学の精神があるわけではありません。国立大学の場合は、大学によって個性の違いはあるものの、均一の質を求めるいわば輪切りの人材育成に力点があります。これに対して、私学の場合、輪切りの人材育成では、面白くないというか、日本の柔軟な構造を支える人材を育成する役割を果たすことができないのです。

明治維新後、日本がヨーロッパの法制度を直接導入しましたが、制度を生み出した土壌が異なるにも拘わらず脱線はしませんでした。その理由はどこにあったかと言いますと、制度を動かす人間が藩の教育や寺子屋などの教育によって、抱って立つべき価値観を身に付けており、確たる道徳観・倫理観、価値観を原動力にして西欧産の制度を動かすことができたからです。そして、制度を動かしながら、多様な価値観を吸収し、制度の日本の変容を図っていったのです。日本の柔構造を支える人材を育成する受け皿としての役割を私学が引き継いでいることを念頭に置かないと、学校法人のあり方の羅針盤が決まらないのです。専修大学の場合ですと、建学の精神は「社会に対する報恩奉仕」ですが、この建学の精神がどういう背

景から形になったのかは、多くの方には不透明であろうと思います。それを明らかにしていくのは、私の仕事だと思ひますし、そしてなぜ創立一三〇年の時に、「社会知性の開発」というビジョンを作ったのかも、あわせて説きたいと思ひます。

Ⅱ 生き残りをかけた大学間競争の時代

(1) 大学を取り巻く環境の変化

私立大学の場合、学生がいなければ、大学は消えます。大学に学生がいなくなれば、私学は存在できません。したがって、困難な状況下にあつても、どうやって専修大学を存続させるのが、今の課題であります。専修大学創立一三〇年の頃に言われたことは、以後一〇年の大学間競争では、日本全体の大学の入学定員と大学進学者数が一致することになることから、大学の競争力がなくなることでした(二〇二〇年問題)。極端に言うならば、「どこでもよければ、どこかの大学には入れますよ。」という状況になると言われたのです。そこで、文科省は、大学の個性と自主性をもって難局を切り抜けるべきだとして、いわゆる護送船団方式を止めました。文科省は、大学のスタイルとして七つのパターンを示し、大学は各自どのパターンを選択してもよいとして自主的な判断に委ね、認可したら全面的に支援するという従前の方策を打ち切りました。その狙いは、大学間競争の中で各大学の個性を鮮明にし、自主性を高めようとすることにありました。その頃、私は学長・理事長を兼ねてい

たと思いますが、専修大学が打ち出した戦略は、研究に基づく教育を行うというものでした。法律と経済を日本語により教授する高等教育機関として私学の一番バツターでスタートした本学としては、研究に基づく教育を行うという立ち位置を崩せないという思いがありました。

専修大学の前身である専修学校は、明治一三年（一八八〇年）に創立されましたが、その時にはまだ官立の帝国大学が形になっていませんでした。近代法の整備に着手して間もない頃であり、刑法（旧刑法）と刑事手続法（治罪法）が制定されたばかりで、民法も憲法もまだ制定されていませんでした。そんな時に、専修学校は、法律と経済を日本語によつて教授することを始めたのです。近代法の法典が未整備の段階にあつて、なぜ日本語による法学教育を始めたのかということ突き詰めると、先ほど触れた専修大学の建学の精神が見えてきます。また、エコノミー（economy）の日本語訳自体が定まらない時期にあつて「経済科」を打ち立て、近代の学問の一つである経済学（economics）も同時に教授しようとしたのは^②、近代化の方向に舵を切った日本の将来を支える人材を育成しようとする狙いからであり、そこには創立者たちの建学の精神が見えてきます。

近代の学問を日本語で教授する高等教育機関をいち早く立ち上げ、専門学校から旧制大学、そして新制大学への変遷をすべて経験している専修大学としては、昨今の厳しい大学間競争にあつても生

き抜き、高等教育機関としてのあるべき姿を示していくミッションがあります。先ほど述べましたが、日本社会の柔構造を支えてきた卒業生が沢山いますし、それを指導してきた教職員だけでなく、校友会、育友会の多くの会員がいて、オール専修の輪の中で相互に支援する体制が整っています。それを無にしないように未来永劫、法学と法人が一体となつて本学の発展のために努力しなければなりません。専修大学創立一四〇年に向けたこの一〇年間の戦略は、入学志願者五万人を確保することを目標とし、本学の魅力を発信することでありました。「量は質を規定する。」という言葉がありますが、志願者五万人の中から入学定員の四千人を確保できるならば、結構面白い人材を輩出することができます。幸いにして、この目標はすでに達成できました。今年度の入試では、東京都内の大学には定員規制がかかったこともあり、志願者数は五万人を若干下回りましたが、まだ立派な競争力を保っています。

（２）大学改革の質の転換

これからの大学改革にあつては、避けては通れない二〇四〇年問題をどう打開するかという課題を抱えています。二〇四〇年には、進学者数の減少期に入りますので、入学定員を充たすことが困難な状況になります。出生数を基準にしますと、一八年後には大学進学者数がどのくらいになるのか推計することができます。現在の大学進学率は約五五％ですが、韓国のように八〇％に近づくことはないだろうと思います。文科省の推計では、二〇四〇年の大学進学率は

五七％になるとの推計を出しています。そうしますと、大学進学者数は五万人ということになります。この数字から考えると、入学定員の割は未充足という状況が到来することになり、入学定員の削減に迫られることになります。力のある大学は生き残るけど、力のない大学は生き残れない。私学の場合であれば、存続が困難となり、崩れることにもなります。

国公立の大学はすでに統廃合を始めていますけれど、私学の場合は、吸収はありますが、生き残るか消滅するか二者選択ということになります。建学の精神は統合できないですね。建学の精神を捨てて統合するというのはなかなか難しい。そうしますと、二者選択を迫られる時代が二〇四〇年には来ることを視野に入れておかなければなりません。まだ遠い先のことだと、皆さん思われるでしょうが、その状況を打開できるだけの財政的・人的基盤を二〇三〇年までに築いておかねばならないことは、戦えないのです。もう目の前の話です。あと七年間でどれだけ基盤整備をなしうるかが勝負なのです。

東京都二三区内に学校法人の本部のある大学に対して定員規制がかかった時に、二三区にある大学は、定員増も学部の新設もできない状況でありました。長年にわたり検討を進めていた専修大学の場合は、特例規定によって学部移転と新学部設置を行うことができました。現在、神田キャンパスの学部は、法学部、商学部、国際コミュニケーション学部の三学部体制になっています。専門職大学院である法科大学院は、既に開設されていますが、神田での大学院

は、法学研究科と商学研究科の二編成となっています。しかし、学部定員の増はできませんでした。苦渋の選択でしたが、二部廃止の決断をしたこともあり、現在の定員数の中で学部定員の再割振りを行い、新たな学部・学科の再編を行うことができました。

しかし、これからの一〇年の大学改革は、入学志願者の減少に対応するため、学部あるいは学科の入学定員を縮小あるいは統廃合すればよいという問題ではありません。入学定員、在学生の総数を減ずるということは、財政上は人件費比率の適正化のために、教員・職員の総数を減じなければなりません。教員の数を減ずるといことは、大学の研究力が削がれることになります。職員の数が減るということは、学生に対する支援が減ることになります。大学組織のトータルとしては、規模の小さい運営しかできない。そうなりますと、研究力の強化や多様な教育の仕掛けはできなくなります。何とか二〇三〇年までは、志願者五万人を維持するのは難しくても、入学定員の一〇倍である四万人は維持しなければならないと考えています。この目標に向けて着々と進んでいる状況ですが、大学改革の質が変わったということを念頭において、柔軟かつスピード感のある対応を採っていくことが肝要です。既に、生き残りをかけた大学改革の時代に入っているのです。

(3) 今後の改革の目標の重要性―いかなる人材を輩出するか―
これからの大学改革にあつては、教育・研究の現場にいる教職員の尽力、学生の自己変革の努力だけでなく、建学の精神の下に卒業

生も育友も一体となつて、いわゆる専修人が一体となつて専修大学のミッションを果たすために力を合わせないことには、立ち行かない状況になります。昨年、総長になりましたから、時間と場所が確保できれば出向いて、オール専修の絆を強めるべく、「母校のために、事の大小を問わず、また、どんなところでも力を尽くせるように、皆さん一緒にやろうじゃありませんか。」という語りかけをしたいと決意しております。先ほど、校友会の桃野会長が大変力強いお話をされましたので、私は、その後を追いかけて行けば良いという状況だと思いますが、皆さん、卒業生と共に専修大学を支えていきたいと思っています。

専修大学は、大学に入つたことで評価されるわけではありません。専修大学を卒業し、社会に出てからどういう社会貢献をしているか、かつ人格を磨き、信頼される人物になっているか、ここが専修大学の評価点であります。評価の対象は、卒業時点ではない。ましてや、入学時点ではない。卒業生の活躍なくして、社会貢献なくして、専修大学の評価は定まらないことを、肝に銘じていただきたい。今後の一〇年間、いわゆる二〇四〇年問題に向けての大学改革の目標を細かくここで話す時間がありませんので、資料として抜刷「生き残りをかけた大学改革と本学の立ち位置」⁽³⁾を持ってまいりました。昨年、校友会の総会の時に話した講演の内容を活字にしたものでありますが、これを是非、後ほどお読みいただきたいと思います。

大学改革の目標の何点かを挙げますと、一つは、総合力で大学一〇位以内に入ることです。創立者の一人である相馬永胤先生は、旧制大学に移行する際に、「七位以内に入っている」と言っておられましたけれど、怒られるかもしれませんが、まずは一〇位以内に入ることを目標に邁進すべきだと考えます。二つ目は、全国型の大学を維持することです。専修大学は、沖縄から北海道まで全国各地から学生が集まる全国型の大学です。しかし、東京二三区にある大学に定員規制がかかつてからは、関東近辺からの入学者の比率が増え、地方からの入学者の比率が下がってきています。全国各地から学生がキャンパスに集い、全く考え方の違う人と価値観をぶつけ合うことによって、価値の相対性の意味が分かり、柔軟な思考ができるようになるのです。皆さんも、学生時代に経験されたことがあるでしょう。このキャンパスでの経験は、日本の柔構造を支える人材を育成する上で重要です。定員規制がかつたことから関東近辺型の大学になりつつありますが、何とかして全国型の大学としての活路を見出し、創立以来の大学の形を維持するように尽力しなければなりません。詳細は、配付しました抜刷を読んでいただければと思います。

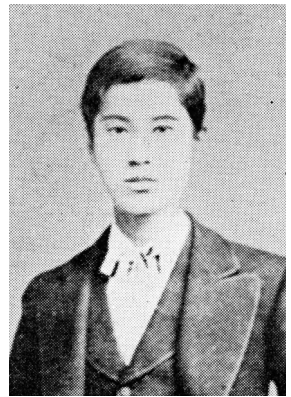
III 建学の精神と二一世紀ビジョン「社会知性の開発」との関係

(1) 建学の精神―社会に対する報恩奉仕―

建学の精神と「社会知性の開発」との関係、これは本日の重要な

テーマであります。卒業する時に建学の精神を言いなさいと尋ねたら、一〇〇%の学生が答えられるでしょうか。七〇%の学生は答えられると思いますが、卒業生全員に浸透しているかということになると、自信がありません。そのためにも、建学の精神の意味、役割を事ある毎に説いていかなければなりません。

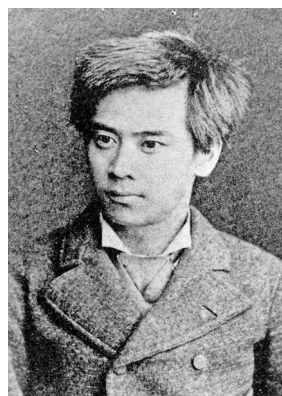
建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」という言葉は、昭和三〇年代以降の卒業生には学生手帳にも記載されているので、馴染みのあるものだと思いますが、行動の中にどこまで沁み込んでいるかは検証を要します。明治一三年の「専修学校」の創立の主旨に、この建学の精神が書いてあったのかと言いますと、主旨に書いてあるわけではありません。その後、校風は校歌に詠み込まれています。創立者たちの生き様は卒業生を鼓舞したでしょうし、創立者たちの薫陶を受けて社会で活躍した裁判官、検事、弁護士、企業家など、様々な分野で活躍した卒業生は、創立者たちの肩で教育された世代であり、創立者たちがどういう思いで高等教育機関を立ち上げたのかを現認しており、言葉にしろとも建学の精神が身に沁みているかと思われます。しかし、時は流れ、新制大学の時代になると、創立者たちの薫陶を受けた人たちも少なくなり、建学の精神を文字に起こしておかないことには、正確な継承ができなくなってきました。昭和三〇年代だったと思いますが、正確な年月日は把握していませんが、建学の精神として「社会に対する報恩奉仕」という言葉が表記されるようになりました。



目賀田種太郎

「報恩奉仕」の前に「社会に対する」という言葉が付されていると思いますが、これには本学のミッションが埋め込まれており、大きな意味があります。父親や母親に恩を返すのは当たり前のことで、それにとどまってはダメであり、社会に対して自分が受けた学問の恩、学校の恩、そういうものを社会に還元して社会貢献をしていくというのが建学の精神であります。今日お持ちした抜刷の一つには目賀田種太郎先生の話が書いてありますが、そこには、創立者たちの薫陶を受けた今村力三郎先生の話も書いてあります⁽⁴⁾。読んでいただければ、どういう薫陶を受けたのかがお分かりになると思います。この抜刷に書かれていないことを一点だけ話します。田尻稻次郎先生の留学中の逸話です。

田尻稻次郎先生は、薩摩藩士でしたが、薩英戦争を経験されています。脱線ですが、山形と薩摩は関係がありますね。明治維新後、庄内藩士数十名が薩摩に赴き、西郷隆盛と接し、「南洲翁遺訓」を残したことから、今日でも『西郷南洲遺訓』⁽⁵⁾を読むことができます。話を戻しますと、田尻先生は、大学南校で勉学されましたが、明治三年に官費留学生に選ばれ、明治四年にアメリカに渡航されました。アメリカでは、ニューヘブーンにあるエール大学およびエール大学大学院において財政学・経済学の勉学をされ、明治一二年に帰



田尻稲次郎

国されています。留学期間中は苦難の連続であり、「意志あるところに道は開かれる」という心境で近代の学問の修得に励まれたものと思います。田尻先生は、留学して二

年目に、留学制度の変更により官費留学が打ち切られ、留学生の召喚令が出されましたが、ハートフォードに留まり勉学を続けられました。普通は官費が打ち切られると、そこで帰国しますよね。私も帰国しなかった経験がありますので、田尻先生の心境は分かります。自分の学問が成り立つまでは帰れない。道いまだ半ばなのです。官費留学が打ち切られた時、田尻先生はハートフォード高等学校のケプロン校長の助力を得て留学を続けますが、そのケプロン校長も間もなく亡くなつてしまいます。その後もケプロン校長の属していた教会のメンバーがケプロン校長の意志を引き継いで、田尻先生の学費等を補助してくれたことにより、明治十一年にはエル大学を卒業し、同大学の大学院で勉学することができたのです。明治一二年の帰国に際し、田尻先生は、支援を受けた教会で惜別のスピーチをされています。そのスピーチの内容が田尻先生の伝記⁽⁶⁾の中に書かれています。支援してくれた教会のメンバーに対し、「皆さんから食費を頂き学費を頂き、大変な恩を受けて近代の学問を修得しました。本来ならばアメリカに残つてその恩を返すべきでしょ

うけれど、わが祖国は近代国家に突入しており、それを支える人材を創らなければ成り立たない。皆さんに受けた恩を、日本で、私は返したいと思う。」という旨のスピーチをされています。このスピーチは、「社会に対する報恩奉仕」という言葉の出发点になるものであると言えましょう。

当時アメリカに留学していた相馬永胤「彦根藩士」(コロンビア大学)、目賀田種太郎「幕臣」(ハーバード大学)、田尻稲次郎「薩摩藩士」(エル大学)、駒井重格「桑名藩士」(ラトガース大学)の創立者たちが中心となつて、ニューヨークで日本法律会社憲法(意識すると「日本法律クラブ規約」)を定め、相互に法律学の修得



相馬永胤



駒井重格

を深め、議論することを約しますが、さらに帰国後は、日本語による法律学を教授するために学校を設けることも誓い合っています。帰国後、創立者たちは、明治十三年に「専修学校」を創立しますが、創立のポリシーは、留学を支えてくれた人たちに対する恩、そして留学によって修得した近代の学問の恩を、いかにして近代化に向かつてい

る母国に返し、いかに近代社会を支える人材を高等教育によって育成するか、この一点にあったのです。もちろん、私財を投げ打つても、学校運営が直ちに軌道に乗るということにはなりません。創立者たちは、弁護人をされたり、横浜正金銀行（現在は、三菱UFJ銀行）や会計検査院に勤務されたり、様々な苦勞をされながら、専修学校の授業を続けられました。最初は夜間に開講し、そして休日も授業をされました。学生が「先生、休日に授業をやるんですか？」と聞くと「学問に休日はない。」と言われたという逸話が残っています。学問をなんとか教授しようとした意気込みが伝わってくる名文句です。確かに、学問をするのに、休日も平日もなく、昼も夜ありません。弛まない尽力により徐々にファンドも整い、校舎も発祥の地である銀座の明治会堂から今の神田キャンパスの場所に移り、教育令によってスタートした専修学校は、専門学校令による専修学校、そして私立専修大学になりました。その後、大学令による旧制大学に昇格し、戦後は学校教育法に基づき新制大学となり、今日の専修大学に至っています。

この間の歴史を振り返りますと、専修大学は、いくつもの難局を乗り越えてきています。大正一二年（一九二三年）九月の関東大震災では、図書館の壁しか残らず、校舎は焼失してしまいました。貴重な「相馬田尻文庫」も焼失しました。旧制大学に昇格（大正一一年）して間もない頃であり、なんとしても授業を展開しなければならず、厳しい大学運営となりました。その時、学長であった阪谷芳

郎先生は、陣頭指揮を執られ、借金をして鉄筋コンクリート造りの校舎を建てられましたが、その建物が旧一号館です。旧一号館は、第二次世界大戦の東京空襲で焼け野が原になったときも形をとどめ、新制大学に移行する際のシンボリックな存在となりました。私はその旧一号館で勉強した一人ですが、学生の頃は、静かなたたずまいの旧一号館が背負っている歴史的な重みは分かりませんでした。

関東大震災の後に建てられた校舎が終戦後も残っていたことは、新制大学に移行する際の原動力となり、今村力三郎総長の捨て身の尽力によって現在の専修大学の財政的・人的基盤が築かれていきました。戦地から帰還した学生・卒業生は母校の復興に力を注ぎ、卒業生の教授は無給で働いたのです。私が学生の頃、親しくしていたいたOBの先生からは、「日高君、私が教員になった頃は無給だったんだよ。」という話をよく聞きました。その先生たちからは、貧乏学生であった私に「ご飯を食べているか。」と言われ、たびたび食事を御馳走になりました。そういう心の絆と言いますか、共に生きるというマインドが専修大学にはあります。専修大学は卒業生が維持・発展させ、日々造ってきている大学だと自信をもって言えます。その精神的支柱は建学の精神であり、社会の屋台骨を支える人材を育成し、社会に貢献するという一点で専修人が結集して頑張ってきたのです。厳しい局面にあっても、途中で放り投げることはしなかった。今後も、建学の精神を旨として、それぞれの立っている場で頑張っていかなければなりません。

建学の精神である「社会に対する報恩奉仕」は、社会との接点を持つています。専修大学創立一三〇年の頃ですが、文科省は大学行政の方策を変えようとすると、大学のミッションとして三つの事項を提示しました。大学の果たすべき役割として、「教育」、「研究」、「社会貢献（地域貢献）」の三つを挙げたのです。社会貢献が三番目に加えられました。研究者は、「象牙の塔」に籠ってはいけません。大学人は、「象牙の塔」から社会に出て、社会貢献を果たすべきだというメッセージでもあります。このことは、専修大学の場合、明治期の専修学校の時代から念頭において実行してきていることです。したがって、社会貢献を大学のミッションに取り込むことに何の違和感もありませんでした。専修大学の場合は、研究者にとどまらず、学生・卒業生も「社会貢献」のミッションを背負っています。その社会との接点が建学の精神に埋め込まれていることから、建学の精神は、本学での教育・研究にとどまらず、専修人としての生き方の羅針盤になっているのです。

（２）社会知性の開発―二世紀ビジョン

本学の二一世紀ビジョンである「社会知性の開発」(Socio-Intelligence)は、建学の精神に社会との接点が埋め込まれていることを重視して設定したものです。建学の精神は不動であり、変えてはいけません。しかし、ビジョンは、時代にに応じて変えてよいものです。二一世紀ビジョンは、この二二世紀の一〇〇年間、建学の精神をベースにして何を創出していくのかの問題です。その答えが

「社会知性の開発」なのです。このビジョンの中にも「社会」という言葉が入っています。この「社会」の意味を解かないと、ビジョンの狙いが鮮明にならないですね。社会という言葉は、多義的であり、日本語で説明するのは難しいのです。夫婦関係も社会ですし、極端に言えば、規模の大小を問わず、個人（自己）が他者（第三者）に接する空間には社会が成り立ちます。校友会も立派な社会です。自治団体なども社会です。さらに、「社会知性」という言葉になると、社会と知性の繋がりをどのように捉えるのかという疑問が出てきます。ここでは、社会の射程範囲には小さいものから大きなものまであることを念頭に置いて、「社会知性の開発」の狙いを理解することが必要だと思えます。細部に神が宿るという言葉がありますし、社会構造の変革は細部を活かすものでなければならぬと思います。「社会知性の開発」の意図するところは、社会の中で現に起きている問題を捉え、その問題を大学の中に取り込んで研究の課題とし、研究力を基にして問題解決の方策を解明し、その英知を社会に発信し、社会貢献を果たしていこうとするものです。社会に出ている卒業生は難問にぶつかったとき、大学にその難問を投げかけ、大学はその難問を解決すべく研究し、解決方法を「知の発信」として社会に還元していくというサイクル、循環を作り上げて、社会の持続的発展を期そうとするものです。そのためには、本学の卒業生は、社会に埋もれていてはダメなのです。社会の中にあつて社会に立っていないければなりません。社会を見渡せなければならな

い。そして社会の柱になっていないと、解決すべき課題を大学に戻しようがない。そういう意味が「Socio」という言葉の中にはあるのです。語源を辿り、いろいろ考えました。

IV sociusをどう捉えるか

(1) socioの語源はラテン語のsocius

社会知性の英語表記である「Socio-Intelligence」という言葉は、造語であり、辞書にそのまま載っているわけではありません。「socio」から解き明かすしかありません。後付けですから。一九一九年に編纂された『ラテン語・ドイツ語辞典』⁽⁷⁾というのがありますが、ラテン語の語彙がドイツ語のヒゲ文字で書かれている辞書です。今ではヒゲ文字表記はあまり使わないので、こんな辞書は読まないということにもなるでしょうが(笑)、ドイツの戦前の判例はヒゲ文字で書かれていますので、私の場合は、読まないことには仕事になりません。「socio」のラテン語は「socius」ですが、「socius」の意味をドイツ語に訳した箇所を読みますと、このレジюмеに書きました「in Verbindung stehend」という言葉が見つかりました。このドイツ語訳は、「社会の中にあつて社会に立つ」という意味に近いものがあります。語彙は「社会の結び付きの中に立っている」という意味です。「socius」の原語には、共同体という意味とともに、結付きの中で立っているという意味も含まれているのです。この意味を見つけたときは、「わが意を得たり」という心境

でした。

(2) 信頼関係の構築

やはり社会の意味は深いです。結び付きの中に立たないと、夫婦関係は成り立たないですね(笑)。社会関係の核である夫婦、親子の結び付きは、小さい社会ながら、一番難しい問題かもしれません。この核の部分が成り立たないと、社会的活動もうまく回りません。同じように、社会の結び付きの中にあつて信頼を得て、信頼関係の中で仕事をしない限り、社会貢献は果たせないし、立派な仕事もできません。信頼関係の中で行う仕事は、やはり立派な仕事になるのだと思います。いくら立派な考え方を持っていて、信頼がなかったら人は動かない。どうしたら信頼関係を築くことができるかを真摯に考え、かつ実践することが必要だと思います。

V あるべき専修人の姿

これから、レジюмеのVの「あるべき専修人の姿」について話したいと思います。時間があと八分ぐらいしかないので、少し端折ります。

(1) 地味と言われようと社会の屋台骨を支える姿が大切

社会的な評判なのですが、「専修大学の卒業生は地味ですね。」とよく言われます。学長をしている頃、いろんなインタビューを受けましたが、最後は、「地味が悪いですか？」と反論することもありました。地味だけど立派な仕事をしているんです。卒業生は様々

な分野で活躍していますし、いろいろな場所で社会の屋台骨を支える立派な仕事をしています。ただ、課せられた役割、職責を果たしても、自分がやったとは言わない。静かに後輩にバトンタッチして去って行くのです。これは創立者たちの姿と重なります。幕末の動乱を生き抜いたサムライたちの創った大学ですから、卒業生にも創立者の立ち姿が沁みているのです。私も学長、理事長を辞める時に静かに去ろうと思いましたが、まだやるべき事が残っていることから不様な姿で立っています。地味な姿が悪いわけではありません。重要なことは、地味でもいいから社会の中に立つて立派に社会貢献をしていることであり、その評価は第三者に委ねればよいのです。信頼を得て自分の職責を果たしている姿が専修人のあるべき姿だと思っています。学生・卒業生が活躍している姿を通して本学のカラーが見えてきます。スポーツで活躍している姿、職業人として社会貢献を果たしている姿をたくさん見かけます。そのことを、本人は語らなくとも、大学が積極的に発信し、専修人の真の姿を伝えていく責務が法人にはあります。学長もわかりです。

これまで学長・理事長を兼ねている頃、いろんな所に行き、多くの卒業生に会いました。社会の中に立っている立派な人材がたくさんいます。話をしていると、「専修大学の卒業生です。」と言うのです。「もう少し大きい声で言いなさい。」と言うのですが、本当に立派な仕事をしています。山形でもそういう卒業生がたくさんいると思います。支部長におかれましても、卒業生の活躍する姿を見かけ

たら、大学に発信していただきたい。卒業生の生き様を見えるようにすることは大切だし、後輩にも活力を与えることになります。嬉しいことに、昨今では、実業界、金融界、政界などの様々な分野において立派な活躍をしている専修人が目立ってきました。

(2) 私の歩いた二筋の道

私は研究者を目指しましたが、厳しい道でありました。戦後、専大出身の刑法学者が私が初めてだと思いますが、曲りくねった道のりでしたけれども、楽しくもありました。当時、私学からは刑法学者はなかなか育たず、東大、京大等の国立大の出身者が大半を占めている状況であり、私学では、刑法の研究者が育つのは、早大、中大等でありました。専修大学では、民事法の研究者は育っていませんでしたが、私が学生の頃は、大学院法学研究科には刑事法専攻が置かれていませんでした。私は、検事になりたくて九州を脱出し、専修大学法学部に入學しました。高校の恩師が「学問の先端は九州になーい、東京にある。」と言われたこともあり、九州を脱出したのです。専修大学には学費免除の制度があり、従兄も昭和三年に専修大学を卒業していましたので、専修大学に進學しました。大学二年のときでしたが、私は、神山欣治先生の刑法の講義を聞いて、魂が覚醒しました。検事になろうと思っていましたので、大学一年次から憲法、民法、刑法をかなり勉強しましたが、最高検察庁退官後に教壇に立たれた神山先生の質問は、実務の裏付けがあるだけに、熟慮を要する質問が飛び交いました。当時、法学部の一コースは、三

五、六人の学生しかいませんでしたので、毎時間がゼミのような授業でした。自分がそれまで正しいと思っていた考えが、神山先生の質問によってドミノ倒しのごとくバタバタと一瞬にして崩れるのです。刑法理論は、覚えるだけでは何の役にも立たない。理論を駆使しなければならぬし、理論を当てはめるだけでは、具体的な事案解決に繋がらないのです。刑法理論を当てはめるだけでは面白くない、刑法理論を創る方が面白いと思ったのです。検事から研究者の道への転換の瞬間でした。大学二年の夏、研究者になると決意をしました。帰省していた故郷宮崎から東京に上京する時、大分との県境に宗太郎峠というのがあります。日豊線の宗太郎駅に近づく、汽車の窓から谷間に宮崎交通のバスが見えるのです。研究者の道を目指したからには、田舎に帰ることはできないと思い、不退転の決断をしました。でも故郷は宮崎の菩提寺に納めることにしていますので（会場笑）、何とか帰らなければならないのですが、人生まなまりません。

大学院に進学する際は、誰に師事して研究するかを考えました。自分の感性に合うと思ったのは植松正先生でした。植松先生は一橋大学の教授でしたが、私が受験する年には定年退官されることが分かり、一橋大学に行ってもしょうがないと思い遂方に暮れましたが、明治学院大学大学院に法学研究科が設置されることから明治学院大学に移れることが分かり、明治学院大学大学院に進学しまし

た。入学して分かったのですが、刑法で合格したのは私一人でした。合格して直ぐに植松先生に呼ばれ、「君は何のためにここに来たのだ。」と尋ねられました。「先生の弟子になるために、入学しました。」と答えたところ、「そうか。分かった。」と言われ、その日から五年間、弟子稼業をすることになりました。植松先生に拾ってもらったことで、研究者の道を歩くことができました。大学二年の夏に決意した研究者への道のりは、つづら折りの厳しい道でしたが、私にとっては、自分の刑法学を構築するためには歩かなければならない、一筋の道でありました。

職業によって異なるでしょうが、多くの卒業生が自分の道を切り拓くために、様々な経験をしながらか切磋琢磨してきています。明治期も大正期、昭和初期にも、多くの専修人が様々な苦難を乗り越え、社会の屋台骨を支える人材となり、社会貢献を果たしてきました。そして、自分の責務を果たすと、次の世代にバトンを渡して静かに去って行くという美感を残しました。私にはその美感が理屈抜きで分かりますが、対外的には地味に見えるのです。しかし、地味であることは、決して悪いことではない。社会の中であって社会に立った姿を発信するのは本人ではなく、周りの人が、大学が発信すべきものなのです。専修人の活躍を支え、かつ成果を積極的に発信することは、大学の責務であると思います。

（3）道徳観・倫理観の確立

社会貢献を果たす場合、信頼関係の中でしか立派な仕事はできま

せん。社会の中に立つべき人材になるためには、道德観・倫理観が確り^{しつ}していなければなりません。昨今の日本の状況を見ますと、倫理観が迷走しています。これを打開するためには、個々人が道德観を確立し、社会の中での倫理観を再構築しなければなりません。専修大学の卒業生にあつては、自分の道德観・倫理観を確立するだけでなく、社会の中に立つのであれば、職業倫理を説かなければなりません。自分の職域の職業倫理を説いて社会的信頼を得て、そして課題解決に繋げることが大切です。建学の精神を花開かせるためには、社会に埋もれてしまつてはダメなのです。是非とも、社会の中にあつて社会に立つ人材になつていただきたい。

道德・倫理における価値項目を何に求めるかは人それぞれであります。専修人にあつては、創立者たちの生き様を勉強していただきたい。創立者たちの自伝や著作を読みますと、そこにどのような生き方をしたのか、生きる上で何を大切にしたのかが分かります。価値項目としては、礼節、信義、誠実などいろいろなものがあります。私がたどり着いた価値観は、「礼節を重んじ、信義を貫き、誠実に生きる。」ことであります。この価値項目から外れたら、私は私ではなくなると思います。命尽きるまで刑法学の研究を続け、自分の生き方を卒業生に示しながら、総長の役割を果たしたいと思ひます。みなさん、共に頑張りましょう。どうもありがとうございました。（拍手）

（司会）日高総長、ありがとうございました。

〔脚注〕

- (1) 私見については、日高義博「学校法人におけるガバナンス改革のあり方」私学経営五七二号（二〇二二年「令和四年」一〇月）二・三頁参照。なお、「私立学校法の一部を改正する法律」が令和五年五月に公布され、令和七年四月に施行されることになった。本改正では、学校法人の基本構造を維持した上、理事会、評議員会、理事選任機関を学校法人の「機関」として位置づけ、各機関の建設的な協働と相互牽制を確立するための規定整備が行われた。

- (2) 創立者の一人である田尻先生が専修学校において講じられた経済学の内容については、田尻稲次郎『経済大意』（初版・明治三一年、一一版「増訂改版」・大正二年、発行所・私立専修大学、発売所・有斐閣書房）から読み取ることができる。同書の冒頭には、「経済学は人類が団結して一社会を成すに当り其有する所の関係を物件上より論ずる所の学問なり」、「簡単に陳述すれば経済学は経国済民の原理を物件上より説く所の学問なり」との叙述がなされている（一頁）。

- (3) 日高義博「生き残りをかけた大学改革と本学の立ち位置」専修大学史紀要一四号（二〇二二年「令和四年」三月）二頁以下。

- (4) 日高義博「明治期の専修学校における法学教育とその成果―目賀田種太郎と今村力三郎を中心に―」専修大学史紀要一四号（二〇二二年「令和四年」三月）三四頁以下。

○一九九一年「平成三一年」三月）三四頁以下。

- (5) 山田済斎編『西郷南洲遺訓』（昭和一四年、六七刷・平成三〇年、岩波文庫）五頁以下、鳥海良邦『南洲翁遺訓集 並翁と莊内藩』（昭和二年、行地社出版部）など参照。
- (6) 田尻先生傳記及遺稿編纂會『北雷田尻先生傳 上卷・下卷』（昭和八年）。留学中の逸話については、上巻「第二章修学時代」二頁以下参照。
- (7) Georges Ausführliches Lateinisch-Deutsches Handwörterbuch, BdI(A-H), BdII(I-Z), 1913-1919, Nachdruck 1998, Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt.